



三菱方城炭鉱をそばで支えた八幡町商店街。昭和44年の閉山で旧方城町の人口は半減。その後、商店街の機能も失われてしまった。

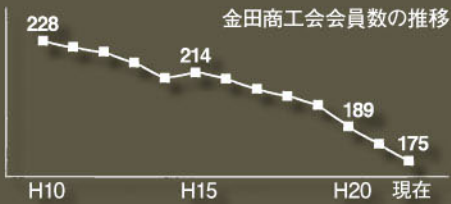
商店街が無くなる時

年を追うごとに下りたシャッターが目立つようになり、そんな風景に人足はさらに遠のいてしまう。やがて商店街はシャッター通りとなり、気がつけばその姿を消していた。このように、かつて日常で身近にあった商店街が、わずか数十年で失われるという信じ難い現象は、全国で数多く起きています。

現に、福智町でも「赤池商店街」と伊方の「八幡町商店街」は数店を残すのみで、かつての「商店街」としての姿は見られなくなってしまう。商店街の消滅は急に起こるのではなく、十年以上の期間をかけて、一店また一店と閉店し「どうとう開いている店がほとんどなくなった」という現象が大半を占めます。

存続の危機に直面

金田商店街でもここ数年で老舗店の廃業・撤退が相次ぎ、現在営業している商店(新町・本町・敷島町)はおよそ55軒。



かつて350軒を超えていた全盛期の数に比べ、7分の1近くまで減少してしまっていました。4年前に閉店した「暮らしの店ミムラ」は、創業100年以上の歴史を誇る老舗店。その三村

和子さんは「わたしが結婚して来た50年ほど前に比べると、街もずいぶん寂しくなりました。6年前の『創業百年大売出し』で、みなさまに恩返しできたことが何よりの喜びです」と振り返ります。この金田商店街を代表する老舗店の閉店は、各店に衝撃を与えました。

この町に唯一残る金田商店街で、現在抱える課題や店主の高齢化、後継者難などをふまえて今後10年を試算すると、その数は現在の3分の2、半分になると予想されています。金田商店街はまさに今、縮小が続く危機に直面しているのです。



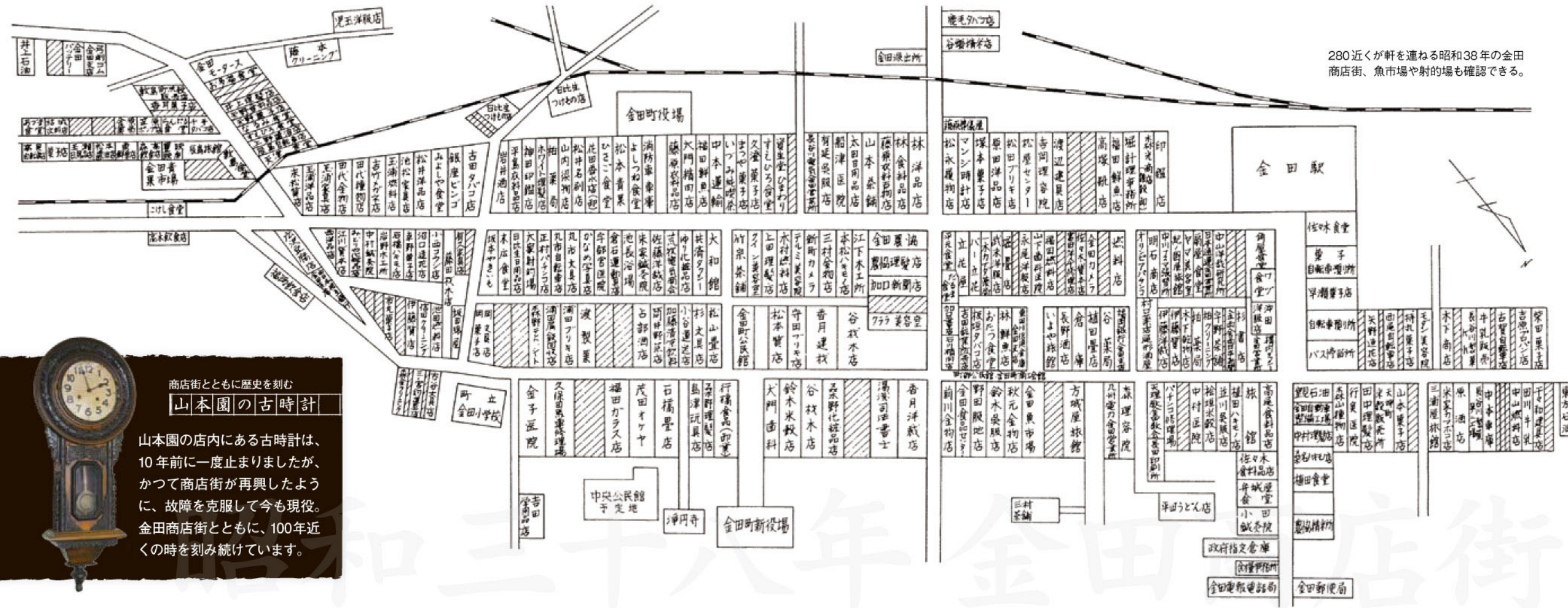
創業百年大売出しの思い出を語る三村 和子さん



七分の一になつた街

幼いころ心躍らせた風景がいつの間にかなくなってしまう。町にあった2つの商店街はひっそりと姿を消してしまふのだろうか。唯一残る金田商店街も、いづれ姿を消してしまふのだろうか。

280近くが軒を連ねる昭和38年の金田商店街、魚市場や射的場も確認できる。



商店街とともに歴史を刻む
山本園の古時計

山本園の店内にある古時計は、10年前に一度止まりましたが、かつて商店街が再興したように、故障を克服して今も現役。金田商店街とともに、100年近くの時を刻み続けています。



明治鉱業と赤池駅とともに歩んできた赤池商店街。かつて地域に密着し、繁栄を誇ったこの商店街もひっそりと姿を消していった。

街を取り巻いてきた壁

近年、商店街を取り巻く環境は激変しています。たとえば自分自身に置き換えてみても、ここ数十年で買い物の形態が変わってきたことに気付くのではないのでしょうか。

では、どうして地域を支えてきた商店街が縮小傾向にあるのか。そこにはいくつかの要因があります。まず、近隣の郊外にいくつもの大型ショッピングセンターが現れ、圧倒的な品ぞろえと価格競争力で打撃を与えたこと。組織的な戦略や効率化には、商店街の個人経営店では太刀打ちできません。また、営業時間や手軽さなどの利便性でいえば、相次いでオープンしたコンビニエンスストアに対抗できません。さらに、社会の進展で郊外のショッピングセンターへのアクセスが快適になり、消費者ニーズも多様化。加えて、町の人口減少、店主の高齢化や後継者不足、情報の発信不足なども原因に挙げられます。

強さを秘めた地域一番店

残念ながら町内では2つの商店街が姿を消してしまいましたが、全国チェーンの大型店舗の進出で、同じ性格の買物なら圧倒的に不利な激しい競争にさらされながらも、金田商店街はその機能と姿を留めています。このことは金田商店街が持つ「固有の強さ」があることを物語っています。かつて「地域で一番の店」の集まりだった商店街。当時、買い物といえば、商店街のそれぞれの専門店であるのが当たり前でした。洋服・靴・眼鏡・時計など、自分好みのお店があり、食材に関しては地元八百屋・魚屋・肉屋で誰もが買求めています。

そういった昔からずっとここにあり続ける商店は「地域で一番の店」として君臨するだけの強い力を宿しています。時代にあわせて努力し、こだわる点は一切譲らず「この商品に関してはあの店だけ」という強烈な存在感と信頼を誇っているのです。

このようなお店の存在こそが商店街の強みであり、その貴重で個性的な経営理念は、商店街の将来あるべき姿や街が生き残っていくための方向性を示しています。